八幡町コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ 新たな利用者の獲得に向けた工夫

- 7年前に新館に移ってからは、幅広い世代の地域の方々をお呼びできるように工夫している。例えば模擬店は子ども向けのものを増やしたり、芸能関係のイベントに関しても、紙芝居を親子で手づくりしたりした。たくさんの世代の方が集えて、またそこで交流が生まれるとよいと思って開催している。
- 子ども向けのクッキング教室を開催するなど、子どもを対象にした事業を増やしている。結果的に保護者の方の利用も増えている。
- 高齢者に人気の事業としてカラオケや映画会を開催している。映画会については、運営委員の（個人的な）コネクションを活用して、放送界や広告代理店のモニターとして、最新の映画を上映している。
- 当コミセンでは、当日利用と言って、当日その時間に部屋があいていれば、１名からでも申し込みをして２時間まで利用ができるよう、少人数でも柔軟に対応している。例えば、楽器の練習をしていただけるイベントルームは大変人気であるが、まだ人に聞かせたくないので１人で練習をしたいという方が、空いている時間を縫って利用しに来ている。

2．地域におけるネットワーク機能

■ 地域の様々な主体をつなぐための工夫

- 地域の様々な団体が集まる新春のつどいを毎年開催している。コミセンと社協さんなど、個々のつながりはあっても、それが一堂に会するところがなかなかない。そのなかで、関係がありそうな団体を同じグループにするなど座席を工夫して、つながりが生まれるように配慮している。
- 新春のつどいやコミセン祭りでも、当コミセンを利用している団体（21団体）の活動内容を展示する機会を設けているが、来館していただく方々から大変好評を得ている。利用者にも八幡町にこんなにたくさんの団体があるのだと知っていただいたり、展示団体にとってもPRするいい機会になったりと、双方から好評を得ている。また、そのような中からいろいろな事業ができないかというニーズを拾いながら、共催事業につなげるような工夫を取り入れている。

■ 現在直面している課題

- コミセン祭り等を開催している際に消防団等との連携は実施していない。一方で、消防団員の知り合いに声をかけ、コミュニティ祭りの際に焼き鳥を焼いてもらっている。

3．持続可能な協議会の運営

■ 新たな事業の実施に向けた人員不足

- 運営委員がだんだん少なくなってきている中で、新しいことを取り入れようとしても、一人ひとりの負担が非常に大きくなってくるところが、これからの課題になる。
- 本当はもっとやりたいことがあるが、なかなかそれが実行できない。

■ 人員の拡充に向けた工夫

- ここ数年、コミセン祭りを実施するにあたって、千川小学校のPTAや子供会、青少協にスタッフの用意をお願いして、模擬店の販売のお手伝いなどをしていただいている。
- 運営委員や協力員の方が減りつつあるので、共催できる団体を探している。例えば、すぐそばにあるM'sガーデンさんにお願いをしてハーブティー入れに関する教室をやってみたり、展示でcollabono親子ひろばをやっていただいているほんわか隊さんと親子コンサートを共催したりと、できるだけ地域の団体さんと共催をしていくことで、いろいろな事業が図れるようにしている。

■ 事業の見直しによる負担軽減

- 「あるこう会」という長く続いた事業がある。昔は、まさしく外へ出て、春は郊外まで軽く散策し、秋は山登り的なことをやっていた。ところが、年月が経過するごとに、参加者が高齢化したため、なるべくいろいろニーズを伺って、例えば今回は韓国料理が話題ということで、近くの大久保のコリアンタウンをみんなで歩いてみようというように、少し内容をリニューアルしていった。
- 今年度は、親子の参加を促進するために、森永乳業の多摩工場へ歩いていき、工場見学することを計画している。

■ 運営委員の世代交代

- 当コミセンでは、若手の代表と大ベテランの運営委員さんがいる。双方の考え方は異なるので、それもよく話し合って、昔のいいところは残しつつも、現代のニーズに合わせて変化していくことも重要である。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ 施設の設備等への要望

- 場所が狭すぎる。例えばコミ祭りで演芸をやるときも、一つの部屋しかないため、お客さんが30人前後しか入らない。かといって２部制にするわけにもいかず制約が増えていることが課題である。

西久保コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

資料３

１．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **他団体との共催による事業の継続的な実施**

- 当コミセンの重要な事業の一つとして、中学生による「多摩湖ナイトハイク」を長年実施している（来年度が43回目）。実施にあたっては以前は西久保コミセン主催で始めたが、現在は共催事業として、関前コミセン・青少協第５地区・関前南地区・五中PTAの５団体で実施している。共催事業で実施することで、中学生が多摩湖まで往復26キロを夜中に歩いて行く、大きな事業を継続して実施できている。
- また、委員の高齢化も進む中で、夜中一緒にあるくことが体力的に難しいため、現在では亜細亜大学の学生にもボランティアとして参加してもらっている（亜細亜大学の野球部員のうち教職希望の学生などが協力してくれている）。
- 子ども科学教室には、理科の先生も参加してくれるなど一部学校とも連携して事業を実施している。共催して実施する事業は以前はナイトハイクくらいであったが、最近では何か事業を実施する上では基本は共催事業にすることで幅広い主体を巻き込んで実施している。

■ **子どもや学生の利用促進の工夫**

- 上記の多摩湖ナイトハイク、こども科学教室などを子ども向けの事業に力をいれていることから、子どもや若年層の利用が多くなっている（子育て関係の団体の利用が多いのが特徴）。
- 天体観測会などは、地域の子どもに限らず、市報に広告を掲載するなど幅広く募集を行っている。

■ **窓口対応の充実の工夫**

- 西久保コミセンの利用者アンケートでは、窓口対応の満足度が他のコミセンよりも高くなっている。その背景としては、2か月に1回程度の頻度で窓口会議を開催しており、対応方法などについて情報交換したり検討したりする機会を設けている。

２．地域におけるネットワーク機能

■ **地域の様々な主体をつなぐための工夫**

- 上述の通り、大規模事業等について地域の様々な団体との共催で実施している。西久保コミセンが拠点となって、さまざまな団体が連携して事業を実施する体制ができている。
- 共催を実現するための工夫としては、毎年度に期初に、地域の各団体の代表が集まって、各団体の年間スケジュールを共有・調整する話し合いの場を設けている。そこで、イベントが被らないよう調整したり、共催の可能性について議論したりしている。
- その他、町会の運営委員とコミセンの運営委員が重複している部分があり（充て職ではない）、自然と相互に交流やスムースな連絡が可能になっている。

■ **利用団体の協力による事業の実施**

- 子ども科学教室や天体観測会などは、コミセン利用団体（きらめきライフ多摩）が実施に協力してくれている。

３．持続可能な協議会の運営

■ **新たな事業の実施に向けた人員不足**

- 運営委員が高齢化する中で、運営側のマンパワーが手薄になってきている。コミセン祭りについては、これまで2日間で実施していたが、運営委員・協力委員やその他実施にあたって協力いただける団体などの負担軽減の観点から1日開催に見直した。

４．適正な運営

－

５．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- ロビーにクーラーがなく、扇風機を回すが真夏には夜でも過ごすことが難しい。もう少しロビーが快適になると、さまざまな団体や個人がより集まるのではないか。
- 最近ではトイレをリニューアルしたことで、利用者が気持ちよく使ってもらえている。利用者アンケートでもトイレがきれいになったという声をもらっている。

御殿山コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得に向けた工夫**

- 健康麻雀を開催したところ、人気が出て参加人数が多くなっている。今では人数制限を設けているほどである。麻雀を知らない人に対しても初めから指導するなど、気軽に参加できる工夫をしている。
- 高齢者の利用が多く、そうした方向けの事業メニューが多い。一方で、子どもや若者の利用を促進するために、今年度からは青少協と井之頭小学校との共催でコミセン親子広場をはじまた。他のコミセンではすでに取り組んでいた事業であるが、当コミセンとしては新たな試みである。地域にはJR社宅跡地の御殿山ハウスなどがあり、親子も比較的多いことから、そうした潜在層が利用したいと思う事業を検討したい。
- 駅に近く立地条件がよい。そのためコミセンで開催されている教室（コミセンの主催事業以外）では、若い方の利用も多いような印象である。一方で、比較的に地域外の方の利用が多い状況である。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **地域の様々な主体をつなぐための工夫**

- 御殿山コミセンでは、老人会や青少協、御殿山町会と運営委員が重複している関係もあり、相互に連携がとりやすい状態が維持できている。例えば、コミセンの会長が町内会長や警察の防犯支部の会長を担っている。
- 利用者間のつながりをつくるために、健康クラブの日程に合わせてロビーでミニカフェを開催している。そこで利用者の方がおいしいお茶やコーヒーを飲みながら交流している。

■ **地域団体とのつながり**

- 防災訓練を行う際には、消防署の所長などに講演してもらうなど、連携して実施している。そうした密な連携ができるのも上述の通り、コミセンの運営委員と他の団体の委員が重複しており、スムースな連携が可能であるため。

■ **マンション住民とのつながり**

- 御殿山地域にはマンションが多い。マンションの回覧版などにコミセンに関する情報（イベント案内など）を掲示している。マンション居住の方も長くなっているので、最近ではコミュニティ活動に関わるようになってきた。少しずつですが、マンション居住の方で運営委員になってくれる人もいる。

■ **利用団体とのつながり**

- 御殿山コミセンはリニューアルのために長期休館していたが、休館前と後で利用団体が減った等はない。以前利用していた団体も他のコミセンに移ってしまうこともなく、戻ってきてくれている。

3．持続可能な協議会の運営

■ **新たな運営委員の確保が困難**

- 上述の通り、コミセン利用者のなかで若い人の利用は最近増えつつある、または今後増えることが予想される。一方で、そうした方をどのように運営側に巻き込むかが課題である。

■ **主催団体の移転による事業の廃止**

- 御殿山コミセンで子どもに人気のあった事業として「みんなで忍者」という事業があった。子どもが忍者になりきって遊ぶような事業であり、子どもや保護者、校長先生などからも好評であった。ただ、数年前にそれを主催していた団体の拠点が御殿山から深大寺に移転してしまい、事業の継続が困難になってしまった。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- エレベーターを設置したことで、利便性は非常に高まった。
- 一方で、場所が狭く、子どもが遊べるスペースがない。今後、子どもの利用を増やしていきたいと考えているが、そうした子どもが遊べる施設にはなっていないのが現状である。見渡せられて、自由に出入りできるようなオープンスペースがなく、細かく会議室に区切られているという造りになっている。
- ウッドデッキがあるが、人が集まれるようなスペースとしてうまく活用していきたい（現在、活用方法は検討中）

西部コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得にあたっての課題**

- 利用している団体のメンバーも高齢化が進み、最近ではコミセンを利用する団体数が減少している。新たな利用団体が出てこないと、組織としての体力がなくなってきてしまう。地域にある桜野小学校は900人を超えるマンモス校であるため地域に若い人がいないわけではない。そうした地域の若年層が入ってきやすいコミセンの環境づくりが急務である。
- 数年前から、コーヒーサービスを提供している。50円でドトールのコーヒーが飲めるのでこれはよいと思っているが、なかなか周知が進まないのが現状である。

■ **SNSによる情報発信**

- 西部コミセンの公式SNSと、委員長個人の非公式のSNSで情報発信を行っている。非公式の方ではコミセンの活動に関するつぶやきみたいなことを発信又はリツイートしており、そうすると１つのつぶやきに700～800人くらいが見てくれている。また、SNSを通して、武蔵野市内で市民活動をされている方とのネットワークもできてきている。また、他のコミセンの協議会メンバーの方ともSNSを通してつながっている。
- 一方で、紙による情報発信については、広報担当の協議会メンバー次第で、年に複数回広報紙を発刊できる場合もあれば、そうでない場合もある。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **地域団体とのつながり**

- 地域の中で活動する団体が合同で実施するような事業は少ない。そんな中で、コミセンまつり・文化祭があることで他団体との交流が生まれ、顔と顔の見える関係がつくれるようになった。特に役員レベルでは顔みしりが増えているので、意思疎通が図りやすくなり、お互いに提案がしやすい関係性が生まれた。一方で、互いに多忙であるため定期的に交流する機会を持てていないのが現状である。
- 近年では文化祭に出展・出演するサークルの数が減ってきていたが、文化祭の盛り上がりを維持するために、サークルの展示・発表の場だけではなく、地域の方が参加したり・体験できるようなイベントを盛り込むなどの工夫を行っている。それによって、地域の人の参加も増えている。
- 地域防災については、桜野地域防災ネットワークがあり、コミセンもそのメンバーになっている。桜野小学校の避難所運営組織とはつながっている。なお、コミセンから地域防災会に出席するのは会長だけである。

■ **共催事業の実施状況**

- 上述の通り、文化祭・コミセンまつりは他団体と連携して実施している一方で、普段からの事業について学校・社協・そのほか団体と共催で実施する機会は少ない。

■ **他のコミセンとのつながり**

- もともと桜堤・境南コミセンとの顔の見える関係構築を目的に、ネットワーク事業を実施してきた。３協議会の関係性構築という当初の目的は達成できたことから、今年度は共同事業は実施しない予定である。

3．持続可能な協議会の運営

■ **事業の見直し**

- 企画・運営を担える人が減ってきた将棋大会は今年度は廃止した。時代に合わないからといった理由ではなく、参加したいという人はいたが、企画・運営をしたいという人がいないという理由でやめた。最近では、カラオケなどもそうであるが、参加したい人はいても、企画・運営にまで回ってくれる人が少なくなってきている。

■ **組織の再編について（新たな運営委員の活躍について）**

- なかなか運営に携わる人が忙しかったりして人手不足に陥っている。
- この4年間くらいで、比較的に若い人が運営に入るようになってきた。そういった意味で組織がリフレッシュされてきてはいる。若い運営委員が自由に動き出せば、より活発な組織運営になる。動いてくれというわけにはいかないので、まずは声を出すところから始めてもらう。そのための雰囲気づくりが大切だと考えている。
- 若い世代の運営委員が増えたことで、働いている人や専業主婦などそれぞれのライフスタイルが大きく異なるメンバー構成になっている。そこで、協議会の定例会は、月ごとに午前の時間（子育て中の方も出れる）と夜の時間（働いている人も出れる）を交互に開催するなどの工夫を行っている。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 第３回評価委員会当時と同様であるが、茶室の利用が低いのと視聴覚室の利用が高いという傾向は変わっていない。
- 体育館が3階にあり、そこでは毎朝10人～20人くらいが集まって卓球をやっている。また、バドミントンサークルも4団体程度あり、団体間の交流会などもやっている。
- 要望としては、和室に畳用の机といすがほしい。

桜堤コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **地域の人材を活かした子ども向け事業の企画**

- 子どもに働きかけるような事業が少なかったという問題意識があり、渋谷のプラネタリウムで解説委員をなさっていた先生が地域にお住まいであったことから、その先生を招いて星を見る会を開催した。先生のご都合が合わなくなり事業継続が難しくなった際にも、スポーツ振興事業団や市に相談しつつ三鷹の天文台の先生につながることができ、事業を継続してきている。
- また、この事業は地域の親子はもちろん、市報にも掲載している幅広い地域にお住まいの親子が参加してくれる。その他、地域の小学校にはポスターを掲示している。
- その他、子どもと大人の輪投げ大会、ボッチャ大会、利用者懇談会、お餅つき、夏祭りなど、地域の他の団体と連携して事業を実施している。小さなコミセンだからこそ、地域団体とつながらないと、事業を継続的に実施することが難しい。このように地域の他団体の力を借りることで事業を展開している。

■ **世代間交流の事業実施**

- 子どもと大人の輪投げ大会をはじめ、大人と子どもの交流を促進するような事業を実施している。

■ **市民への周知の必要性**

- 桜堤コミセンは少しわかりにくい場所にあるので、場所の周知に関する工夫も必要だと考えている。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **利用団体・地域団体とのつながり**

- 上述の通り、小さいコミセンだからこそ、地域団体と連携して事業を実施している。例えば、子どもと大人の輪投げ大会は、地域の高齢者団体という方たちの協力でやっている。こうした取り組みを通して、地域団体との顔のみえる関係性の構築に努めている。また、利用者懇談会も年1回は必ず開催し、利用団体と地域とのつながりの創出にも取り組んでいる。
- 現在はエレベーター工事のために休館中であるが、建物がなくて集まるところがないことがこんなに大変なことなのかと感じている。それほど地域にとってコミセンは集える場所として重要な役割をはたしていた。
- 今後は地域防災の面で、地域の防災組織などとつながって取組を進めていきたい。
- ボッチャ大会の開催は地域のケアセンターと協働で企画した。
- 学校との連携について、ボッチャ大会の練習場所として学校の体育館を借りた実績がある。こうした形でも学校と連携していけるとよい。また、学校の先生方もコミセン祭りなどには挨拶に来てくださる。また、コミセンとしても桜野小学校の推進会議の委員になっている。また、学校以外にも学童クラブの先生ともつながりを持っている。

■ **他コミセンとのつながり**

- お互いの協議会メンバーの交流を主な目的として3コミセン（西部・桜堤・境南）のネットワーク事業を実施してきた。当初の目的であるネットワークも構築出来てきたということで、今年度からは実施しないこととなった。ネットワーク事業はなくなっても、引き続き3コミセンの運営委員で連絡を密にとっていきたい。

3．持続可能な協議会の運営

■ **市外在住者の運営委員への参加**

- 市境にあるので、他市の住民の方の利用も多い。その中で、最近では2名ほど市外在住ながら運営委員になってくれている人がいる。

■ **運営委員の世代交代における課題**

- 運営委員の入れ替わりはあまり多くない。高齢化も進んでおり、運営委員の世代交代が課題になっている。そんな中、今年度は3名の新しい運営委員が入ってくれた。

■ **事業の見直し**

- 特に見直して何かを廃止した実績はない。一方で、桜堤コミセンは、高齢者の方向けの事業が多かったので、今後は事業を整理しつつ子育て世代向けの事業もやってきたいと思っている。昨年度からは子育てひろばもやっている。施設規模が小さいので難しいかと思っていたが、小さいなりに良いところもあるようで盛況である。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 一番の懸案であったエレベーターについては現在設置工事中である。
- 難しいとは思うが、やはり施設が小さいため、もう1階分増築するなど、使える部屋やスペースが広がると利用団体も増える。

本宿コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **子ども向けの事業の実施**

- 子ども劇場やコンサートを毎年実施しており、大変好評である。子ども劇場は子供を持つ親御さんのほうが期待をしており、今年は7月に加えて12月にも実施予定である。幼稚園から小学校低学年くらいのお子さんたちが多く参加してくれており、参加者も毎年コンスタントに100名を超えている。

■ **新しい利用者の獲得にあたっての課題**

- コミセンがあることは知っているが入ったことのない人が地域には多くいる。本宿コミセンは東の端に立地しているので、なかなか人目につかない。そうした中で、どうやって新たな利用者を掘り起こして、足を運んでもらうのか、情報発信をどのようにやっていくのかが喫緊の課題である。一方で、現状だと事業実施に精一杯でそうしたことに手が回らない。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **利用団体・地域団体とのつながり**

- コミセン祭りの開催にあたっては、普段利用してくれている団体や個人の方が協力してくれ、交流も毎年活発になってきている。協力していただいた利用団体の方からは、「楽しかった」という言葉を頂いたおり、毎年継続的に協力していただいている。
- 成蹊大学のマジシャンズクラブと連携している。マジシャンズクラブさんがコミセンのホールを練習場所として利用していたことから、声がけをしてイベント等に出てもらうようになった。その他、成蹊大学のUni.という地域ボランティアサークルとも連携が取れるようになり、コミセン祭りなどでもお手伝いしてくれるようになった。コミセンで開催していた絵本の読み聞かせイベントにUni.さんが参加していた経緯で、そこからお声がけしたのがきっかけである。若い力がたくさん入ってきて、非常に助かっている。
- 小中学校との連携でいえば、本宿小学校と山中の作品を、コミセンのロビーに展示するなどの取組を行っている。ロビーへの展示は利用者の方からも好評であり、とてもロビーが和やかな雰囲気になる。また、学校とは、何か問題があったときや相談したいときにお声をかけて、懇談会のような場を設けることがある。
- 防災団体との連携は今後より一層進めたい。この地域の町内会（新生会）と、今後話しあいをしなければいけないと感じている。どこまで防災の面で一緒にできるのか、やらなくてはいけないのか、もう少し密に意見交換をしたい（現時点では、新生会の縁日の会場としてコミセンの会議室を貸し出している程度のつながりである）。また、防災会とも同様にコミュニケーションの充実を図りたい。

3．持続可能な協議会の運営

■ **運営委員の人手不足**

- 運営委員の人数は比較的に少ない。ボランティアでやっているので人数が少ないと1人あたりの負担が非常に大きくなる。一方で、入っていただきたい50代・60代前半の方は働いている方も多く運営委員をなかなか増やすことができない。町内会や小学校から充て職のような形で運営委員になることはない。自分で募集をみるか、あるいは今いる運営委員に頼み込まれて加入するかのいずれかである。毎年１～2名程度が新規で入ってきてくれている。

■ **利用団体の巻き込み**

- コミセン祭の開催にあたっては、運営委員だけではなく、利用団体の人にも協力してもらって開催している。運営委員だけでは大規模な事業ができないため、利用団体にも積極的に関わってもらっている。最近では、協力してくれる利用団体も増え、たくさんの団体がお手伝いしてくれることで、「逆に協力しやすくなった」ということで、より多くの方が協力してくれるようになった。良い循環が生まれている。今後も、利用団体にもお手伝いしていただきながら、コミセンを盛り上げていきたい。
- その他、上述の通り、成蹊大学の地域ボランティアサークルと連携しており、コミセン祭りの際にもお手伝いしてもらっている。

■ **事業の見直し**

- この1～2年の間、運営委員のなかで「これからも続けていきたい事業」「少し手直しが必要な事業」「やめたほうが良い事業・もう実施が難しい事業」についてアンケートをとった。その結果から、ダンスパーティーと講演会については今後のあり方を検討しようということになり、今年度はとりあえず実施しない方向で検討している。
- 一方で、新たな事業として、俳句がテレビでもブームになっていることから、俳句会などは新たにやってみようという話になっている。
- その他、パソコン学習会は時代のニーズに合わなくなってきたので廃止した。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 誰でもトイレがあるが、以前介護士よりこのトイレは介護がするには使いづらいと言われたことがある。便座が低く座るのが大変といった声など、広さだけではなく使い勝手のところで改善点がある。高齢の方も多く使用する施設なので、今後要検討である。
- 1階はガラスが多く、初めて来られる方も「このコミセンは明るくていいですね」といってくれる。開かれた印象もあり、割とロビーの利用率が高いのが特徴である。
- 以前は葬儀の利用もあったが、最近では駐車スペースが限られていること、ホールも大きくないこと、夜の宿泊は必須（仏様を無人のところに安置しない）という点で、民間の葬祭場を利用する人が多い。

本町コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **コミュニケーションが生まれる環境づくり**

- コミセン1階のサロンスペースには、テーブルを置いて自由に座っておしゃべりができるような環境にしている。その結果、様々な利用者が座って周りの人としゃべっている。サロンが一つのコミュニティの場になりつつある。また、OLの方が休憩にくるなど、場所柄か幅広い人が利用してくれるようになった。一方で、学習室がないため、学習する人たちの場所がなくなってしまうのは課題である。
- また、サロン以外にも和室などに可動式のテーブルや椅子を置くなどして、くつろいでもらえる環境づくりを行っている。
- 本町は市内・市外の幅広い人がきてくれる。本町周辺の人はもちろんだが、それ以外の市内の人・より広い地域の人にも引き続き使ってもらいたい。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **地域住民とのつながり**

- 本町コミセンの周辺にはマンションが多く、顔も知らない、名前も知らないという人が増えてきた。その中で、3.11を経て地域の絆の重要性を認識し、絆づくりの一環として「まちをきれいに」という環境美化活動を始めた。
- この清掃活動には、子どもも参加しており、また毎回JCの方が20名以上も参加してくれている。少しずつ輪が広がってきている印象がある。また、外国人の方も多いエリアであるが、外国人住民の参加も増えてきており、心が通じ合って国際交流ができている。
- 今後もマンション住民は増加していく。住民の高齢化も進むとともに、新しい若い夫婦なども移りすんでくる。こうしたマンション住民が気軽にコミセンを利用してもらうようにコミュニケーションをとっていきたい。
- 実際に今ではマンション管理組合の総会や会議などを本町コミセンで実施するマンションもある。引き続きつながりをつくっていきたい。
- 3.11の際には市からの要請で帰宅困難者の受け入れを行った。駅近ということでもあり、本町コミセンの役割は大きい。だからこそ地域とのつながりというのが重要だと考えている。

■ **地域の他団体とのつながり**

- まちづくり協議会との連携について、毎月定例会を設けている。また、センター祭・元気市といった事業については、協議会と合同で実施している。一方で、自己点検・評価表にあったように一部の人からは協議会とのコミュニケーションについて改善の必要ありという声もでている（具体的には不明）。

3．持続可能な協議会の運営

■ **持続的な事業の実施**

- 運営人数も限られているので、花火のような大きなイベントごとではなく、息の長い事業を実施していきたい。
- 本町コミセンでは、センター祭・元気市・高齢者ひなまつり・クリスマス・ふれあい交流会などを実施している。持っている予算や人手の中で、今後もいろいろな事業を展開している。

■ **新たな事業の創出**

- ふれあい交流会は、自由な発想のもと毎年実施する内容が異なる。小規模にやっている事業だが、その中で人気が出た企画は次年度に事業化するなどの工夫をしている。実験的に自由な発想でやってみて、人気が出たら、事業化するというように派生的に取り組みを進めている。

■ **事業の廃止**

- わくわくサロンという事業では、外部講師を呼んで、認知症対策の体操講座などを実施した。その他、オレオレ詐欺対策の講座など様々な講習会を実施した。一方で、この事業は3年間つづいたが、運営委員・参加者の高齢化のために、今年度は廃止している。

■ **協議会内のコミュニケーションについて**

- 協議会の定例会について、これまでは平日夜に実施していたが、家族持ちの方も多いので、平日午前中の開催にした。一方で、時間を変更したことで働いている方は来れなくなってしまった。また、会議後に簡単なレジュメを配布しているが、それがもらえるなら会議に無理に出なくてもよいということで参加者が減ってしまった（結果的に、一部のメンバーに固定化してしまった）。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- エレベーターが無いことが課題である。利用者に聞いてみると、エレベーターが無いためにコミセンに来られないという方も多い。最近では、駅近の便利なマンションに住み替えたというお年寄りが割といる。また、小さいお子さん連れの家族も多くなっている。そのため、車いすやベビーカーでもストレスなく利用できるように、エレベーターを設置したい。老若男女が使ってくれるような施設にすること自体が、この地域の環境浄化につながると考えている。
- また、トイレの改修を行いたい。トイレをもう少し綺麗に明るく使いやすいものにしたい。

緑町コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **幅広い世代の参加の促進**
- 地域ふれあいまつりは、ハロウィンイベントなど子どもたちやその保護者が集まれるような企画を多く設けた。パパ・ママ層の人の参加を増やすために、そうした企画を試験的に多くした。
- また、最近ではジュニア層だけではなく、シニア層も参加できるように、「みんなの広場」という形で、シニアの方も含めて楽しめるような企画を増やしていきたい。

■ **窓口サービスの充実**
- 窓口を2人体制にしたことで、余裕がでてサービスの質が上がった。また、運営委員会の前に窓口会議というものを開いて、窓口として気を付けるべきことや共有すべきことを話し合う場を設けている。窓口担当者で情報などしっかり共有できるようになったこともサービスの質向上の理由である。

■ **広報誌について**
- コミセンだよりは担当の負担が大きかったのが課題であった。今では、有志の人で、うまいやり方を検討してもらっている。急を要する場合やイベントが少ない際には1枚だけにして、イベントが多いときには2枚にするなど、臨機応変に対応していくことを検討している。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **地域の他団体とのつながり**
- 地域ふれあいまつりでは、地域の保育園が作品を展示してくれている。また、近くの高齢者の老人ホームでも何か絵手紙のようなものをつくってもらい展示している。
- また、青少協の方に手伝ってもらい、地域ふれあい祭りのなかで、テニスコートを子どもたちに開放し、自由に走りまわったり、紙飛行機を飛ばしたり、ミニ四駆をしたり、シャボン玉をしたりしていた。そうした取り組みもコミセンだけだと人手が足りない。青少協の人に手伝ってもらえたことで実現できた。
- 地域にある四中とは、防災訓練や卒業式・入学式などに委員長・副委員長が出席するなど、定期的にコミュニケーションをとっている。また、四中の先生も交代されると挨拶にきてくださる。四中の生徒も受験勉強などでコミセンを利用してくれる。また、卓球お楽しみ会などのイベントの際には、四中の卓球部の生徒もきてくれる。
- 緑懇話会という場を設けている。この懇談会には、町会や商店街など10団体くらの地域の団体が集まって、地域のことについて話し合っている。30年間そうした場を設けている。最近では、バス停の位置が不便であったことから、懇話会で話し合って、関東バスに話を持っていた。その結果、今ではバス停の位置や発着数も増え、日常の買い物にいくときなど非常に助かっている。また、最近のテーマとしては、グリーンパーク商店街に民泊ができたことで、外国人観光客のマナーの問題などが心配という声があがり、それについて対策が必要かどうか議論をしている。
- パークタウンがやっている防災訓練には協議会の委員長が参加している。

■ **地域住民とのつながり**
- UR都市機構のマンションが地域にあり、マンション住民の高齢化も大きな課題になっている。武蔵野市はデイサービスが利用しやすいので、最近市内に引っ越してきたという高齢者もいる。こうした層とのコミュニケーションも今後の課題である。URにお住まいで運営委員になってくれる人もいるが、声がけしても人数が増えないのが現状である。

3．持続可能な協議会の運営

■ **事業の見直し**
- 夜店でのプロパンガスのガス爆発事故がニュースになったが、それ以来、室内でのプロパンガスの使用は禁止にした。それによって、調理室の火力が小さくなり以前実施していたうどん講習会を取りやめざるを得なくなった。また、カラオケ教室も、カラオケ設備が古いことから、参加者が集まらなくなり廃止した。

■ **新たな運営委員・協力委員の確保について**
- 地域ふれあい祭りに来てくれた若い世代などには、声掛けを行っている。一方で、そうした世代は子育てや仕事などで忙しい。また、シニア層で退職した人であっても、特に男性はこうした活動に参加してくれない。今度はサマーコンサートを企画しているが、そこでもシニアの方には引き続き声掛けをしていきたい。
- いきなり運営委員になってもらうのは難しいので、まずは協力委員になっていただき、そのあとに運営委員にまでなってほしい。若い人の中には、ふれあい祭りで焼きそばを焼くなどのスポット的な関わりであればできるという人も多い。
- 子ども祭りのときには大学生のボランティアにも手伝っていただいた。子どもとしても、若いお兄さん・お姉さんがいることで、すごく楽しかったようである。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**
- エレベーターが設置されたことで、車いすの方でも2階が利用できるようになった。地域ふれあい祭りでも、エレベーターができたことで、展示物を２階に設置することができるようになった。
- 1階のホールにテーブルと椅子があるが、非常に重くて動かすのも大変である。できれば軽いテーブルと椅子になることで、自由に配置も変えてよりスペースを有効活用できる。
- 2階の音楽室の防音設備があまりよくなく、音が漏れるために打楽器は使えない。

吉祥寺南町コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

１．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ 新たな利用者の獲得に向けた工夫

- 「親子ひろば」は、若いお母さんを中心に月に３回やっている。多い時には親子あわせて30名強となるが、男性の参加が少ない。男性を巻き込む工夫として、子どもを仲立ちにして地域デビューしてもらおうと、隔月で「パパひろば」を開催している。お父さん同士の交流も生まれて、外で会っても挨拶できるようなネットワークが形成されているようである。そこで「親子ひろば」の女性スタッフが待っている形だと、お父さんのほうも気後れするのではないかと、男性スタッフをそろえるように工夫しており、運営委員の関係者に声をかけて今は７名くらいいる。
- 「パパひろば」に参加するお父さんは20代後半～30代前半が多く、まだまだコミセンの戦力になるには遠い話だが、コミセンに足を踏み入れることに躊躇しない世代を作りたいと思っている。

■ 利用者の広がりと課題

- スタジオやホールがある点が特徴的であり、最近演劇やダンスなどで若い学生や社会人の利用が増えてきている。一方で、従来ある地域団体の人たちが、趣味などでは集まるけれども、ネットワークの拠点としての機能が薄まってきてしまっているという課題がある。
- コミセンで麻雀を行うのはあまり印象が良くないのではと思っていたが、意外と女性の参加者が多く人気になっている。

■ 施設の活用

- 大型館であるだけではなく、キッチンやホール、ピアノが置ける部屋も３部屋あり、ハードの面では非常に恵まれている。またエレベーターも、今ではなくてはならないものになっている。
- ホールやピアノ部屋があることで、音楽関係の利用者が多い。ただしホールは、南町在住者で2か月前、20名以上でなければ貸し出していない。卓球台もあるので卓球場にもできる。ただ、20名以上集まる団体は少なくなってきたので、現在は半分ずつ使用できるようになっている。その際に、音の出る団体同士をぶつけないように配慮している。
- その日に来て空いていれば、ピアノ部屋などは一人２時間まで予約なしでも使用できるようになっている。

２．地域におけるネットワーク機能

■ 利用者・利用団体とのつながり

- 「福祉の部屋」という場所を造って、４つほどある福祉関係の利用団体が顔合わせをできるようにしている。各々取り組む内容は多少は違うかもしれないが、結局共通するような効果があるのではと期待している。
- 音楽サークルで、色々な団体が土曜日の夜と日曜日にかけて、活動の発表会をしている。その前に打ち合わせがあるので、例えば同じコーラスをやっている団体が顔見知りになったり、活動の情報が分かったりする。お互いの活動曜日がわかることで、効率的に部屋の予約ができたりもするようだ。
- 同じ時間帯に、２～３の団体の発表会を合同で行ったこともあるが、それぞれの思いが違うため、一度は成立しても継続的に続きにくい。今後も声はかけて、いろいろな団体が集まる時間帯を作りたい。

■ 地域団体とのつながり

- 「防災ネットワーク」は、各種いろいろな団体が集まり、地域のつながりが生まれている。各種の団体が事前に話し合うことによって、顔見知りになり、コミュニティが広がっている。
- 南病院が新築移転し、コミセンのすぐとなりにやってきている。病院の隣にあるコミセンは珍しいので、地域医療に関しては今後も勉強していきたい。

３．持続可能な協議会の運営

■ 時代に合わせた事業の見直し

- 「どじょうつかみ大会」は、かつては主力の事業だったが、主力メンバーの高齢化や、手間の問題などで、３～4年前に中止した。子供たちに水場の遊び場を提供しようと、どじょうを買ってきて、神田川にネットを張って放していたが、どうしても完全に放流したどじょうを回収しきることができなかった。自然の環境をもとの状態に戻すということに関して、クレームが入ったこともあり、検討ののち中止した。
- 以前あった「市民円卓会議」は中止したが、ほかの形でネットワークづくりを進めるなど、スクラップアンドビルドの考え方で見直している。
- コミセンと商店街が共催で行ってきた、夏休みの三小のグラウンドを使ってのカーニバルがあり、市の助成も受けていた事業だが、商店街が疲弊し、設営や模擬店出店が難しいということで中止を考えた。しかしその際、サッカーや少年野球クラブのお母さん、お父さんたちが、自分たちでやれないかと交渉をし、 ５年前くらいから形をかえて実施している。テントを張るのは大変だからターフでやる、夜は電気配線ができないので打ち切るなど、工夫をして継続している。

■ 人員の拡充に向けた工夫

- 地域の約6,300戸に対し、167人の協力員が手配りで、月間のコミュニティニュースを配布している。一方で、スタッフの高齢化などもあり、負担が大きくなってきている。
- 今年度、「助っ人バンク」と言って、運営委員でもなく、協力員でもない、ワンポイント・スポット的に協力してくれる人の呼びかけを行った。現在、男性3名、女性１名の計４名が集まっている。
- これまでは、スタッフの誰かが活動が難しくなったら、個人的な人脈の中で受け継がれ、何とか維持できてきた。しかしその層自体が高齢化しており、同じようなやり方では手詰まりとなっている。コミセンの利用者にもコミセン運営に関わってもらいたいと、呼びかけを行っている。その際に、コミセンの運営に関わってくれればコミセン利用を優遇するなど、何かメリットをつけたほうがよいのかなど、試行錯誤している状況である。
- 常に利用者に対してウェルカムな雰囲気にしておかなければ、若い人も入ってきにくいだろうと、雰囲気作りやハードルを下げることに留意している。

■ 開かれたコミセンとするための工夫

- 運営委員＝窓口となってしまうと、内に閉じてしまうので、役員体制の中では、窓口をやらないフリーの役員も増やしていかなければと思っている。

４．適正な運営

－

５．施設・設備の管理

■ 施設の設備等への要望

- 季節によっては学習室に入りきらない利用者が訪れることもあり、その際は他の会議室に学習室を拡大している。部屋を柔軟に仕切って使えるようなパーテーションがあるとよい。

吉祥寺北コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ 窓口サービスの充実

- 窓口のちょっとした対応によって、コミセンの雰囲気を左右すると思うため、入りやすいコミセンとなるよう、運営委員が意識している。

■ 施設の活用

- 和室の利用頻度が高く、演劇や伝統文化、親子ふれあいの場に使っている。
- 世代を超えたつながりが生まれるように、小さいお子さんから高齢の方、障害のある方まで使えるように、色々とリニューアルしている。今まで使いにくかったところを、オープンスペースとして展示などができるようにしている。
- 多目的に使える広いロビーの利用価値も高い。ロビーは、特に貸し出しはしていないが、コミセン主催で、講演会やお祭り、コンサート、かつてはパソコン教室などを行っていた。ロビーは多くの人が集まることができるので、ほかの部屋ではキャパシティ的に厳しい場合は、ロビーを活用することになる。

2．地域におけるネットワーク機能

■ 利用者・利用団体とのつながり

- 「さわやか祭り」では、利用者が主催側となり、団体同士の交流が生まれている。終わった後に反省会を行っており、今後の課題について検討する機会となっている。

■ 地域団体とのつながり

- 「さわやか祭り」では、前回の評価委員会からのアドバイスをもとに、地域のつながりをつくっていこうという目的で、現在は11団体に参加してもらっている。北コミセンの周りには小学校、吉祥寺ホーム、保育園などがあったがつながりができておらず、まずはPTAや青少協の団体の方に集まってもらって、地域の横のつながりをつくるために何かできないか相談し、お祭りをしようということになった。実行員会を作り、模擬店や催しなどの企画・運営はすべて実行委員会が担っており、会場と予算はコミセンが持つことにした。「さわやか祭り」で作っているおみこしは、吉祥寺ホームに見学に行ったときに、ロビーに飾ってあったペットボトルのおみこしをみて参考にした。
- 「さわやか祭り」の成果としては、各種の団体がコミセンのいろいろな行事に参加してくれるようになったことがある。
- 地域の団体には、ロッカーや倉庫のスペースを提供して荷物の受け入れを行っている。

3．持続可能な協議会の運営

■ 継続的なコミセン運営のための工夫

- 「さわやか祭り」は数年しか続かないだろうという声もあったが、結局十数年続いている。内容を変えていかないとマンネリになってくるので、少しづつ内容を変えている。また、大きなお祭りは文化祭とさわやか祭りの二つがあるが、前者はコミセンが主体、後者は地域が主体となって運営している。
- 若いメンバーが入ってきて、「過去はこうだったからこうでなければ」という垣根をすべて取っ払おうという発想が出てきた。部屋の利用に関しても、今まで６名以上が条件だったものを、利用者からの意見も聞きながら会議を開くなどして、最低３名、空いていれば１名でも使用可とした。

■ 事業の見直し

- ふらっと散歩のような感じで出かける「春の散策」は、参加者よりも事務局の人数が多い状態が続いており、中止になった。
- 「パソコン学習会」は19年の歴史があるが、運営する側も高齢になってきており、参加者数も減っている。基礎編と応用編に分けて実施しているが、今後中止するのか、形をかえてスマホなどを取り入れるのか、検討している。
- 「子ども映画会」は、市から映写機を貸与されて毎月開催していたが、映写する技術者が高齢化している。また、映写機に使うランプがなくなってきており、ストックが尽きたら終わりかと考えている。

■ 担い手の拡大に向けた取組

- 運営委員が18名と少ないため、負担が大きい。協力員からの格上げ、各団体からの参加、個人的な口コミでの依頼などを試行している。運営委員は北町の方には限っておらず、八幡町や本町の人も入っている。
- 福祉の会やPTA、青少協には、コミセン担当が１名ずつおり、何かやる際には、コミセン担当が人を集めてくれるため、18名でもやりくりできている状況である。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ 施設の設備等への要望

- 視聴覚室があるが、この防音が十分でなく、そばにある学習室に支障が出ているので、防音対策を行いたい。
- 体育館も利用者が多いが、夏場の温度が32度を超えており、空調を取り付けることを検討していただきたい。

吉祥寺東コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ 広報誌の充実

- コミセンだよりでは、単にコミセンの行事について書いているのではなく、町のことも載せるようにしている。コミセンの事務室には地域のニュースを入れるボックスがあり、運営委員がニュースを集めてきて、そこに入れて共有をしているが、編集はかなりの部分を特定の運営委員が担っている。校正などは他の役員も担っているのだが、今後同じものを継続していけるような体制についての検討を進めたいと思っている。
- コミセンだよりは、地域の6,900戸に、運営委員と協力員が全戸配布している。1,000部はシルバーに委託もしているが、残りはすべて自分たちで配布している。一方で、市民からコミセンの行事の通知だけにしてほしいとのクレームも入っており、運営委員会や役員会で検討しているところである。ぜひご意見のある方は、運営委員として中に入ってきてほしいなと思っている。

■ 施設の活用

- こじんまりとした施設のため、運営委員としても管理がしやすい。また部屋は３部屋で、８割近い稼働率となっている。
- ホールが若干狭く、マックスで60名程度しか入らないのだが、隣の児童室も合わせて使う等の工夫によって、できるだけ広いスペースを確保している。
- 九浦の家ということで、きれいな庭が一つの売りになっている。和室では年に２回、庭を見ながらのお茶会を行っている。

2．地域におけるネットワーク機能

■ 利用者・利用団体とのつながり

- ほかのコミセンと異なり、文化祭の類がない代わりに、「新春餅つき大会」を開催しており、去年も600人超の方が参加した。中の運営委員だけではなく、諸団体や利用者の方の懇親及び協力関係を深めるいい機会である。もちのつき手として、利用者の若い方々が名乗りを上げてくれ、最初から最後の反省会まで参画してくれた。また、運営委員総出で行うため、運営委員の中での結束の場ともなっている。
- 利用者懇談会は数年前に一度行っているが、利用者の皆さんから意見を聞く機会は少ないと感じている。総会の前に、利用団体にコーラスや楽器などを披露してもらう機会を設けたりはしている。
- ３年ほど前からは、１回きりは別として、利用団体には必ず団体登録をしてもらうようにしている。様々なカテゴリの利用団体があり、利用者が「このようなことを習いたい」というような声があった場合、受け入れられる余地のある団体に窓口から紹介することもある。
- 「アジアを知ろう」という事業は長い間続いており、安定的な参加者がいる。固定メンバーもいるが、対象となるアジアの国によってその国に関心のある方が参加している。講師の方には、その道の専門の大学の先生など、外部の方を招いて開催している。スタッフの個人的なつてやリサーチによって、講師を呼んでいるような状況である。

■ 地域団体とのつながり

- 「新春餅つき大会」について、近隣の本宿小学校、武蔵野第四小学校に告知を行っている。そこの学童の方は、一度来たらその後も継続的に来ているのではないかと思う。
- 「つどい」という事業では、地域の諸問題について話し合い、できれば解決まで持っていければということで活動している。しかし、最近は市の施策の勉強会的なものが多くなっており、参加者が少なくなってしまっている。

3．持続可能な協議会の運営

■ 協議会活動の充実

- 運営委員会は毎月１回欠かしたことがなく、時々臨時の委員会も開催している。そのほか、会則に役員会についての記載を追加し、役員会も月に１回行うほか、頻繁に臨時役員会も開催している。体制的には非常に整っているので、議論の中身を深めたいと思っている。
- 自己点検・評価表を作成する際には、臨時運営委員会を開催し、基本的には運営委員の総意によって作成を行っている。臨時運営委員会に先立ち、全員に自己点検・評価表を作成してもらっている。コミセンの活動は、結果よりもプロセスが大事だろうと考え、各運営委員から出された成果実感や「ここは一生懸命やった」というような声を極力尊重するよう心掛けている。

■ 事業の見直し

- フリーマーケットは年に２回開催していたが、リソースや手間の問題から、今年は年１回の開催としている。そのほか、基本的には継続的な事業の実施ができている。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ 施設の設備等への要望

- 部屋数が少ないため、利用者の希望に応えきれない部分がある。また、ホールも収容人数が60名であり、若干狭いと感じている。

吉祥寺西コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ 若い世代の利用・他市からの利用の増加と課題

- 練習室があることで、比較的、若い方が集まりやすい作りになっている。また、プレイルームに関しては、若い方がダンスの練習に来る。ただ圧倒的にダンスの練習に来る方々が、他市の方ばかりで、今度どうすればよいかという課題の一つになっている。コミセンの中でも、グループでダンスの練習ができる、予約不要であるという話がSNSの中で伝わって、利用者が集まってきている。一方で、本来の使われ方とは違う形になってきているかなという印象はある。

■ 施設の活用

- 練習室にピアノがあるため、防音ではないという問題はあるが、使い勝手が良いということで環境的には良い状態だと思う。
- エントランスに鉢植えを置いて、園芸クラブの活動を行っている。そのほか、裏庭の芝生を刈ったりもしている。

■ 分館の活用と課題

- 分館の運営は、近所の方に専属の管理人をやっていただいている。ただ、分館は1部屋のみで、なかなかイベントを実施できない。近所のマンションの管理組合の会合や、健康体操などに使われている。本館と離れた場所にあるため、本館がいっぱいのときに分館はどうですかという話をして使っていただいているが、100%有効には活用しきれていないように思う。
- バスを利用する人は、分館のほうが使いやすいという人も多い。
- 分館は１部屋で40名程度は入れ、演劇の練習によく使われている。隣が第一小学校、あとは近隣もそうクレームにならない場所にあるので、演劇で大きな声を出しても、周りからはそこまで問題にならない。

2．地域におけるネットワーク機能

■ 利用者・利用団体のつながり

- 利用者懇談会を開催しており、地域のいろいろな団体と会い、意見交換を行っている。顔合わせと協力できる関係性づくりということでやっている。懇談会が２つあるので、この２つがうまく作用していると思う。ただ、利用者懇談会への参加者・団体が少ないことは課題に感じている。より広い意見を頂くため、もっと人を集めたい。
- 現状利用者懇談会は、大体、20名程度の参加である。そこでは、コミセンの申し込みの仕方、予約の仕方、コミセンの施設の問題など、様々なご意見を頂くので、運営委員で真摯に受け止めて改善が進んでいる。
- コミセンを頻繁に使用する人に対しては、利用者懇談会への参加を条件に使用してくださいと言っている。
- 利用者の方には、年末の大掃除なども来てもらっている。

■ 地域団体とのつながり

- 本町２・３・４丁目地区には、保育園と幼稚園が12ある。お母さんたちをどのように巻き込んでいくかということが、今後の課題である。幼稚園や保育園のお母さん方は将来的に小学校などのPTAになるので、継続的につながりが強くなっていくとよい。まだつながりは実現していないが、そのような方を巻き込んでいけば、世代が若返ってくるという話をしている。
- 園芸クラブが、第一小学校、井之頭小学校の堆肥づくりに協力している。作った堆肥を、コミセン祭りのときに配ったりしている。
- PTAの方々は結構活発に活動している。また防災関係の方とのつながりもあるが、そちらは比較的年齢が高く、世代が二極化している。
- 福祉の会は、コミセンと共催事業をたくさんやっており、密接な関係にある。福祉の会の中の、「あじさい」という高齢者の集まりがあるが、月に２回コミセンを利用している。福祉の会は、コミセン運営費のなかで中核になっているほか、コミセンもわずかながらの予算を組んで、福祉の会の事業に援助している。

3．持続可能な協議会の運営

■ 継続的な事業の実施

- 週１回以上は、年間を通して事業を実施している。
- 一番新しく始めたのは、７， ８年前に始めた「サロンイベント」である。また、昨年度でパソコン学習会をやめている。
- 事業数が多いが、事業の担当が分かれているので、そこまで負担にはなっていないように思う。

■ コミセンの利用者や担い手の状況に合わせた事業の見直し

- 年々利用者が少なくなってきたことと、それ以上に、お手伝いいただいているサポーターの先生方が、みんな高齢になってきたということで、パソコン研修会を廃止した。３年来検討して、最終的に廃止するという決断になった。
- 大きな事業をそんなに頻繁にやっているわけではないが、サポートをする人々が年々少なくなってきているので、今後事業を縮小するあるいは新しいものにする、などの見直しをしなければならない。ただし、新しいものを行う際に、すべての世代の方に受け入れてもらえるようなものを考えるのは難しい。新しい事業は、どの世代に対象を絞ってやっていくかということが一番の問題である。
- サロンイベントを何年か前まで継続的にやっていたが、１年半くらい休止していた。しかし、講演ということには皆関心が大きく、コミセンの30周年を機に復活しようということになった。

■ 人員の不足等の課題

- 年度初めには、コミセンの取組に何か参加できるものはありますかという問い合わせがある。毎年、協力員として70～80名が名前を登録している。一方で、登録した協力員がそのままそっくり参加いただけるとは限らない。
- 事業が多いため、運営委員の負担が一層大きくなっていくことの共通認識がある。アクティブに活動できる若い世代を巻き込みたいが、コミセンだよりの募集にはなかなか応募がない。ボランティアで働くというのは、昔と考え方が違ってきていると思うので、有償ボランティアを考えてもよいかもしれない。また、役員が２日に１回集まっているが、負担が大きすぎ、専任の職員の確保が必要ではないだろうか。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ 施設の設備等への要望

- 練習室があるのはいいところだが、防音装置がないため、音が漏れて近隣からクレームになるようなことも、中にはある。
- また、施設が古くなってきている。

けやきコミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得に向けた工夫**

- 開けたコミセンを目指し、利用者は地域性を問わず受け入れている。一方で、市外の方がいらして、クレームをつけたり、個人情報だから名前は出せないなど、窓口とやりあっている。予約の条件には区別があり、市内の人は45日前から、市外の人は10日前からとなっている。
- 大野田小学校の前に新しい戸建ての住宅地ができているが、まだ利用者として巻き込む仕掛けは行っていない。これから取り組んでいきたい。

■ **施設の活用**

- 施設が公園のなかにあって、初めて来る人はここがコミセンなのか、と言うことも多い。細かいところまでこだわって造られた素敵な建物である。公園があることで敷地は広く見えるが、一本通りを入るので、わかる人にはわかるが知らない人はずっと知らないのがデメリットである。
- 窓が広くとってあり、学習室に座っている人達も緑に囲まれて勉強するような雰囲気がある。また、コミュニティルームがあり、だれでも自由にお茶を飲んだりお弁当を食べたりするのが心地よく、一人でぽつんと来てもいられる場所である。窓口のつくりが開放的で、仕切りをつくらずに利用者と一緒に話をしながらいろいろなことができるように作られている。
- キッチンや茶の間は他のコミセンと比べて小さいが、地域の茶の間、要するに家庭的なつながりが持てるようにということでこのような形になっている。
- ギャラリーがあり、絵や写真の発表会などを無料で行うことができる。非常にすてきな照明で、天井につけた照明も角度からこだわっている。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **地域団体とのつながり**

- コミセンができてから、駅からコミセン方面へも人の流れが生まれるようになり、地域の雰囲気が変わった。
- 障害者、高齢者の施設など、地域のほとんどの組織とかなりつながりを持っていると思う。一方で、幼稚園、保育園とのつながりはまだ薄い。
- 色々な取り組みを行っているうちに、町に知り合いが増えて、挨拶する人も増え、町が明るくなったような気がしている。地域フォーラムをやったり、防災の会を立ち上げてそこにいろいろな団体を巻き込んでいく中で、色々な団体と交流が生まれ、お互いに頼り頼られる存在になってきている。
- 先日も、青少協ジャンボリーの指導員が足りないということで、亜細亜大学のボランティアセンターにお願いした。そのように、お互いにお願い事ができる関係になってきている。

■ **現在直面している課題**

- 多様な地域団体がそれぞれ取り組んでいる活動が重複することがある。取り組んでいるメンツは重なっておりそれぞれ忙しいので、これからはそれらを整理して行ったほうが良い。
- 地域フォーラム等で話し合った、やりたいことが、そう思いながらもできていない。

3．持続可能な協議会の運営

■ **大イベントを実施する工夫**

- けやきまつり、けやき夏まつり、どんど焼きとむかしあそびの三大イベントでは、実行委員会制をとっている。春にくじ引きで運営委員が決まった時点で、三つのグループに分け担当する実行委員がきまる。そのほかに130人程度いる協力員もスタッフとして入り、実行委員会で準備をしている。実行委員会は20名程度いるため意見がぶつかることもあるが、話し合いをしながら作り上げる中でチームワークや協力体制ができて、最終的に皆が協力して足並みがそろってきている。その運営の中で、思いがけない人が力を発揮してくれたりすることもある。

■ **事業の見直しによる負担軽減**

- かつては四大イベントであったが（12月のクリスマス会があった）、１月のイベントまでの期間が短く、準備が大変だったため、思い切って事業の見直しを行い三大イベントとした。12月のクリスマス会は、まちづくり局のけやきあそび隊に主として担ってもらえるようお任せし、３つのイベントを運営委員が担当している。

■ **人員の拡充に向けての取組**

- 運営委員には、市内の人が多いが、市外の人にも入ってもらっている。
- 自分は、子どもが先にコミセンで遊んだり、行事に参加するようになったのちに、人の縁があって運営委員に入った。
- まちづくり局では、運営委員が１人、協力員が２人、合計３人いればチームとして成立する。12チームあるが、その責任者が運営委員であるというケースは少ない。この場が、新しく入った人が自由に取組を行える場になっているようである。そうやって人を増やしているというか、色々な活躍の場を設けている。けやきの事業の一環として予算も毎年組みなおしているので、事業費のバランスもとれている。
- 現在いる、比較的若い世代の運営委員のモチベーションをどのように維持すれば、コミセンの運営がうまくいくのかを考えている。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 工具室は、工作をする人の工具を入れる部屋として作ったが、今はけやきの物置になっている。工具室に行くときに、手前の工作室の中を通らざるを得ないが、何とか工作室を通らずに行けるようになるとよい。
- イベントでは集客室が多いが、ホールは丸椅子を置いても50人程度しか入れない。３階建てに増築し、部屋を増やしたいという想いがある。

境南コミュニティセンター【意見交換会まとめ】

１．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得に向けた工夫**

- 「モーニングハイク」では、より多くのみなさんが興味をもってくれるような場所を考え、選んで行っている。ただ行くだけではなく、行った場所で遊べるなど、子どもにも喜んでもらうようにしたいと考えている。
- 利用団体（スポーツサークル、老人会など）が運営側に回り、一般利用者を対象にしたスポーツデーを開催した。これまで2月に開催していたが、サッカークラブなどに所属する子どもたちが雨でクラブが中止になったら来ることを狙って、開催時期を６月の梅雨時期にした。
- 部屋の貸出は、市民を優先しているが、体育館の利用に関しては、市内外の住民で区別はしていない。

２．地域におけるネットワーク機能

■ **利用者・利用団体とのつながり**

- 「モーニングハイク」企画では、地元に住んでいても知らなかった場所や歴史を知ることができるということに反響がある。また小さな班で出ていくので、その中のコミュニケーションで、全く知らない人同士で話したり、仲間になったりする。ただ、子どもの数が減っていて、初めはサッカークラブや野球部が団体で申し込んでいたが、最近は子どもが塾などで忙しくなっていて、なかなか参加がかなわない。
- 「モーニングハイク」の班決めは、希望がない限り、運営委員で行っている。全然知らない人で組ませたら楽しいのではないかとか、年齢的なバランスとかで組み合わせを考えている。ハイクから帰ってくるとグループがとても仲良くなっており、休憩所でゲームもするし、その後につながるのは、とてもうれしい。
- 体育館があることから、「スポーツ委員会」を設けており、スポーツ関連の団体から１名ずつ出てもらっている。年に何回か話し合いをして、スポーツデーを企画している。各団体が企画から運営までやってくれており、一般の利用者を対象にイベントを開催している。
- 建物周辺の清掃、草取りなど、利用者がそのようなことにも協力してもらえるようになるとよい。

■ **地域団体とのつながり**

- 境南コミセンの場合は、地域のいろいろな団体から運営委員になってもらっているので、運営委員会そのものが団体のつながりになっている。運営委員は50名程度いる。
- 元コミセン会長の人が地域で盆踊り実行委員会を立ち上げ、コミセンもお手伝いする形で、盆踊り大会を行っている。25団体が参加しており、皆金一封を持ってきてくれ、それによって成り立っている。今年の盆踊りは、イトーヨーカドーがバックアップしてくれ、従業員の外国の方が民族衣装を着て舞台にあがってくれた。ほかにも銀行や老人会の参加もある。そのような団体には、コミセンのOB・OGなどが広く呼び掛けている。
- 小学校の学童の保護者が作ったグループがもととなって餅つき実行委員会を立ち上げ、１月の末に餅つきを行っている。

■ **他コミセンとのつながり**

- 西部・桜堤とは、何か事業をやろうというときには、主になったコミセンをみんなが応援するという形でやってきている。３つのコミセンで何度か打ち合わせを行い、コミュニケーションをとっている。桜堤で落語、西部でピアノ、境南でカントリーコンサートと、違う系統のイベントを話し合いながら開催している。

３．持続可能な協議会の運営

■ **人員の拡充に向けての取組**

- 「モーニングハイク」は毎年、新人役員が担当となる。これは、コミセンのよさを次世代に継いでいこうという将来のためと、新人役員を地域の人にお披露目するという二つの目的がある。新人だからと言って控えていないで、上に立って、だれかを頼りつつもやらせてみようと思った。
- 運営委員は、「成人活動部」「地域対策部」といった５つの部のどこかに入らなければならないことになっているが、各部の部長による行動が増えている。企画は各部に任せているが、毎月の運営委員会では、各部の部長から「今こうしています」「こういうものをやります」など報告があり、それがすごく楽しい。
- どの部に入るかは希望も聞くが、この人はこちらに入れたほうがいいという調整は最終的には役員が行っている。

■ **担い手の高齢化**

- 色々な団体の関わりがあり、担い手の糸口はあるものの、担い手の高齢化が課題になっている。声掛けはしており、いざというときは学校のPTAや支部社協などの人が手伝ってくれはするが、若い人が定着しない。

■ **運営委員の構成の課題**

- 様々な地域団体の人で構成されているのは、地域のことについていろいろな話し合いができてよい一方、先人がやってきたことを変えようとすると、すごく反発を受ける。
- 地理的にも市外の利用者が多いが、市内の団体が運営を担っていることで、市外利用者を納得してもらうのに難しいところがある。市外利用者は有料にしようという話も出たことがある。
- 運営についても、市内（境南）の人で担っていこうという雰囲気があり、市外の人は受けれてこなかったのではないか。

■ **事業の見直し**

- かつて桜堤児童館に協力をお願いして「わいわい広場」というのをやっていたが、そちらを見直し、社協と協力して新しく「くまのこ広場」を立ち上げた。

４．適正な運営

－

５．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 子どもの出入りが多いので、ロビーがもう少し広いとよい。
- 体育館では特に高齢者など熱中症の危険があるので、15分おきに気温を測って記録している。卓球、バドミントンの人は窓やカーテンを閉めて使いたがるが、危ないので注意喚起している。冷房が付くとよい。
- トイレが改修されるとありがたい。

関前コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

１．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得に向けた工夫**

- ３～４年前まで、「コミセンまつり」の中でカラオケ大会を行っていたが、それを発展的に解消して、現在は独立したイベントとして「ミュージックフェスティバル」を開催している。カラオケ大会は、カラオケと民謡の好きな人がほとんどの催しものだったが、今はコミセンの利用団体の主に音楽芸能系の方々が携わってやってもらっている。カラオケ大会の時には参加者のほとんどが高齢者であったが、ミュージックフェスティバルになってから、子どもや学校の先生、音楽の先生なども来てくれるようになった。学校の先生は音楽の素養をお持ちの方も多いので、フェスティバルで演奏するなど、つながりが増えた。音楽室で練習する人たちが中心となる発表の場でありつつ、地域で活動している人とも一緒になって行っていて、利用団体も結構増えてきている。

■ **分館の活用**

- 本館から分館までは普通に歩いて15分弱ある。高齢者が増えていく中で、少しでも近くにコミセンがあるということはいいのではないかと思う。
- ただ、分館には窓口がなく、本館が管理も受け付けも行っているため、管理上は大変である。管理費が安く、常駐が求められ、木曜休みで土日は開館と言う条件での管理を受けてくれる人はなかなかおらず、本館で分館の分をカバーしているのが現状である。鍵の開け閉めも本館の窓口で行っている。
- 分館での自主事業はないが、福祉の会主催の麻雀教室・囲碁教室、市の不老体操は定期的に分館で開催されている。

■ **施設の活用**

- エレベーターの設置をして、高齢者が２階へあがるのが楽になった。
- 調理室はないが、湯沸かし室というのがあって、調理室との中間くらいの大きさがあるので、衛生面で差し支えがなく、保健所の対応が必要ないものに限り、料理教室やうどん作りなどを行っている。

２．地域におけるネットワーク機能

■ **利用者・利用団体とのつながり**

- 「コミセンまつり」は、関係者が一堂に会し、２日間にわたって行うという意味で重要なお祭りである。運営委員・協力員はもとより、地域の福祉の会など各種団体の方々と協力しながら展示を行っている。地域、団体、個人が集まって一つの目的に従って何かを成し遂げることは、地域の活性化にとって大事であると考えている。
- ミュージックフェスティバルでは、コミセンを利用する音楽芸能系の利用団体の出会う場となっている。
- コミセンは地域のリーダーであれ、というよりも、コミセンにおいて色々な世代が集まって発表の場があるということが重要だと考えている。
- 「七夕づくり」は、折り紙が得意なお年寄りに来てもらい、ロビーで子どもたちがいろいろなものを折ったりしている。

■ **地域団体とのつながり**

- 商店街のお祭りである「関前八幡まつり」では、関前南小学校の校庭で花火大会を行うが、PTAや青少協、福祉の会などにコミセンも加わって、６団体で執り行う。花火を行うために実行委員会を組織しているが、このような実行委員会は都度組織されていて、声をかければいつでも協力してくれる関係にある。
- 近くに関前南小学校があるが、学校とじかにというよりも、青少協やPTAを通じたつながりのほうが深い。

３．持続可能な協議会の運営

■ **事業の見直し**

- 「コミセンまつり」のなかのカラオケ大会は、高齢者ばかりではなくみんなでやりましょうという想い、またコミセンの教室の受講者に充実した発表の場を用意したいということで「ミュージックフェスティバル」に発展的解消を行った。また、カラオケ大会では機材のメンテナンスにお金がかかることや、機材を操作する人がいなくなったことも要因であった。
- 10年前くらいに卓球大会を行っていたが、小学生の部と大人の部の募集をかけても、小学生が全然集まらなくなってきたことと、参加者が卓球教室に通っている人に限られるようになってきたことを受け、廃止した。子どもが減ったというわけではなく、ロビーには子どもが溢れかえるくらいだが、皆それぞれのことをやっている。卓球大会は廃止したが、子どもたちが自由に卓球ができる環境は用意している。

■ **人員の拡充に向けた工夫**

- 若い人が何度も会議等に出られないのは承知の上で、年２回、何かに協力すれば運営委員になれるという形をとっている。委員になれば、運営委員会で発言権があるので、新しい行事をやるにしてもよいだろうから、委員になってくださいと声掛けをしている。50代の運営委員も何名かおり、長い目で見て、その中の何人かが引き継いでくれたらありがたいということで、委員の資格は、他のコミセンと比べるとずいぶん緩くしている。

■ **人員リソースの課題**

- 新しい事業を立ち上げたいと思っても、コミュニティ協議会の中で、それについて詳しくなかったり、意欲がなかったりで、今の体制では難しい。新しい事業を拒んでいるわけではなく、発案もたくさんあるのだが、その事業をお任せしても大丈夫ですかと言うときに、手を挙げる人がいない状況である。

４．適正な運営

－

５．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**

- 関前コミセンは、建物が真四角で動きやすく、部屋の広さも地域住民の数にあっていて、その辺は非常にいい造りをしている。調理室を作りたいといっても、建蔽率の問題で難しいが、設備の老朽化に関しては全般的に見直してもらった方が良い。
- 災害を見据えたときに、電気がとまっても稼働できるものなどを入れて、災害に強い設備に更新するなどは、検討を重ねて徐々にやっていく必要があるのではないかと思う。

中央コミュニティセンター 【意見交換会まとめ】

1．運営の工夫・利用者（住民の満足度）の向上

■ **新たな利用者の獲得に向けた工夫**
- 大型館であるため、市内外からの利用者があり、利用団体もかなり多彩である。
- コミセンの利用に関しては、市外在住者に対しても制限を設けていない。ただし、部屋の予約に関しては、2ヶ月前まではエリアの方を優先しており、その他の方は1ヶ月前から予約できるようになっている。

■ **施設の活用**
- 分館の中央集会所は三鷹駅の近くで交通の便が良いため、他市からの利用者が多い。
- これまで、ほとんどの事業を中央コミセン本館で行っていたが、改修による7か月の休館をきっかけに、今年度は分館でも事業を開催した。分館にもせっかく２つの広いエリアがあるので、今後は分館での事業も検討したい。
- 本館２階のステージ付きの大広間はステージがついており、後ろにある和室で着替えもできるようになっており、使い勝手が良く、踊りの方には大変喜んでもらっている。
- 全体として、設備的には利用者には満足していただいていると思う。

2．地域におけるネットワーク機能

■ **利用者・利用団体とのつながり**
- 利用者同士の交流の場として、年に１回利用者懇談会を行っており、利用者の出席率はよい。
- コミセンの大掃除では利用団体に呼びかけを行い、80～100名程度の参加がある。
- 「桜まつり」は長らく中央コミセンが続けている事業で、運営委員と協力員は毎年お弁当を作ったりしている。毎年500～600人のお子さんが来てくれている。

■ **地域団体とのつながり**
- 「夏祭り」「文化祭」「餅つき」は中央コミセンの３大イベントであるが、地域の方の交流が生まれ、利用者にも大変喜んでいただいている。「夏祭り」「文化祭」では、町内会や地域団体、個人商店の方が模擬店をだすかたちで、協力が得られている。そのほか、「文化祭」では地域の小中学校のお子さんの作品を展示するほか、利用団体の方の作品の発表の場ということで、１週間ほどロビーに展示を行っている。
- 日赤奉仕団や、中央福祉の会といった地域団体との関わりがあるが、協力することでお互いの理解度が高まっている。
- 第一中学校がコミセンの向かいにあり、一中生の利用は大変多い。お祭りや餅つきといった事業の開催にあたり、一中生にお手伝いをしてもらっている。また、「一中フェスティバル」においては部屋を貸す形でかかわりを持っている。

■ **現在直面している課題**
- 「夏祭り」「文化祭」においては、利用者や利用団体の模擬店・イベント等への参画はあるものの、企画全体の運営に関しては協議会からも声掛けをしたことはなく、協力は得られていない。今後は、利用者・利用団体にも運営に協力してもらいたいと考えている。
- エリアには第一小学校と井之頭小学校があるが、第一小学校は吉祥寺西コミュニティセンターの向こうにあり、また井之頭小学校も井の頭通りを挟んだ向こう側にあるため、なかなか小学生の利用者が増えない。

3．持続可能な協議会の運営

■ **担い手や参加者の高齢化**
- コミュニティ協議会のスタッフの高齢化のため、各人の負担が大きくなっている。
- 地域全体が高齢化している状況で、事業への参加者も比較的高齢であり、なかなか新しい人が入ってこない。また、協力する地域団体（日赤奉仕団、中央福祉の会）においてもスタッフの高齢化が課題となっているということである。

■ **分館管理の担い手の不足**
- 現在、中央コミュニティ協議会が２館とも管理している。25名の運営協議会で、本館と分館どちらも２人体制で常駐しており、人材が不足している。

■ **人員の拡充に向けての取組**
- 事業は、運営委員はあくまでサポートというかたちで、市民中心で実施されている。このなかから、年に１～２名程度、協力員が出てくることがある。
- ここ２～３年、エリアに新しいマンションが建設されており、マンション入居者の若い世代のコミセン利用もぼちぼちみられている。若い世代の方は夜まで家にいない家庭も多いので、まずは夏祭りや文化祭に来ていただいて、コミセンを理解していただくようにしたい。
- これからは、若い世代の方をどういった形で取り込めるかを運営委員会として考えていきたい。
- コミセンが次世代につながっていくには、小中学生のころから関わって知ってもらうといいのではないか。

4．適正な運営

－

5．施設・設備の管理

■ **施設の設備等への要望**
- 中央コミセンは大型館であるため、平均的に利用者が多い。利用者が高齢化しているということもあり、利用者からはエレベーター設置の要望が出ている。
- 施設面では、体育館はないが、調理室・お茶室など設備的には恵まれている。ただ、３階までの階段があるため、どうしても１階の部屋の取り合いになっている。３階にも会議室などいい部屋があるのに、エレベーターがないことがネックとなっている。
- 思い切り音を出せる部屋がないので、防音付きの部屋が１部屋でもあるとよい。
- 現在、お子さん連れが立ち寄ったときに遊べるスペースは取れていない。昔は子ども部屋が１部屋あったが、今はそこも会議室などの多目的の部屋になっているので、子どもが遊べるスペースが取れるとよい。